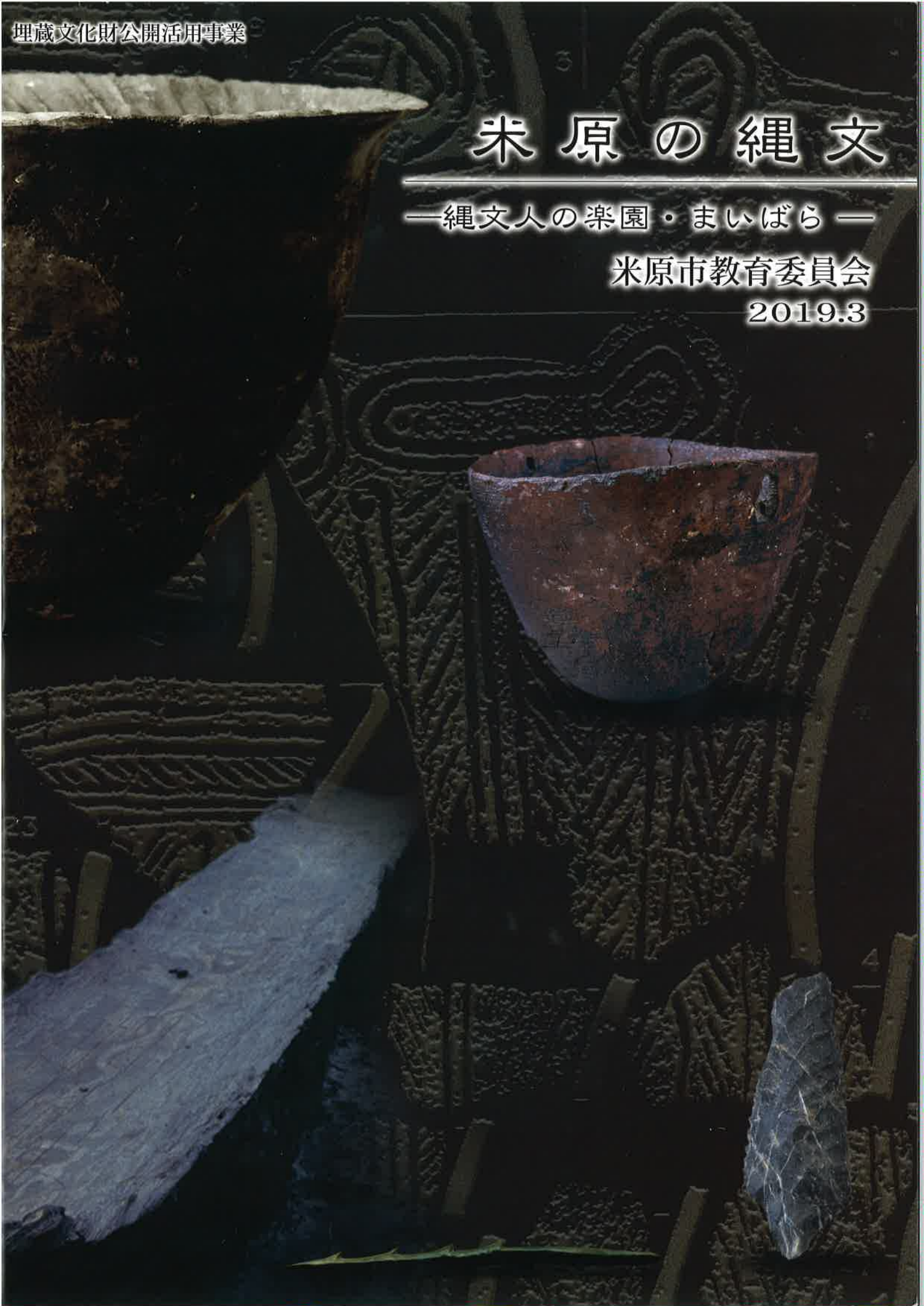


米原の縄文

—縄文人の楽園・まいばら—

米原市教育委員会

2019.3



米原の縄文

—縄文人の楽園・まいばら—



米原市歴史キャラ
「縄文くん」

時期区分

大別	細分	C14年代※
縄文早期	前葉 中葉 後葉	約9000年前
縄文前期	前葉 中葉 後葉	約6000年前
縄文中期	前葉 中葉 後葉	約5000年前
縄文後期	前葉 中葉 後葉	約4000年前
縄文晩期	前半 後半	約3000年前
弥生時代		約2500年前

目次

縄文時代はじまる	1
I 琵琶湖と内湖と川と山 —縄文人の楽園—	2
GALLERY まいばらの逸品 1・2	3
II 滋賀県の縄文遺跡	7
i 各時期の様相	7
ii 地形の組み合わせと遺跡分布の変化	8
コラム：粟津縄文人の四季	9
III 遺跡が語るまいばらの縄文文化	11
i 暮らしの始まり —旧石器・縄文草創期—	11
コラム：遠い狩人たちの暮らし	12
ii まいばらの縄文遺跡の展開	13
iii 湖辺の暮らし	13
コラム：在野の研究者① 磯崎文五郎さん	16
iv 山麓の暮らし	17
GALLERY 番の面遺跡 石鏃コレクション	18
縄文時代 Q&A	20
v 姉川上流の暮らし	21
vi 伊吹山への祈り	23
コラム ヤマトタケルと縄文の神々	24
IV まだまだあるよ、まいばら縄文1万年	25
i 草創期・早期	25
ii 前期	25
コラム：在野の研究者② 粕淵辰次さん	25
iii 中期	26
iv 後期	26
v 晩期	27
用語の解説	27
V まちづくりと縄文遺跡 —立命館in杉澤—	28
VI 「まいばらの縄文」に会える施設	29
VII 参考文献・協力者一覧	30

縄文時代はじまる

日本列島での人類の活動は、約20000年前ごろからようやく明らかになります。旧石器時代とよばれる最終氷期の真っ只中で、気温は現在より7、8度ほど低かったと考えられています。四国・九州と本州は地続きで、海水面は現在より100mほど低かったようです。

縄文時代が始まる約15000年前ごろから気温の上昇が始まり、約6000年前には、いまより2、3度高く、温暖化が進みます。このため、縄文時代が始まるころには、コナラなどのドングリが豊富な落葉広葉樹林の占める割合が増え、気候や植生の変化からナウマンゾウなどの大型獣は絶滅し、イノシシやシカなど、いまのような動物相にかわりました。

動植物の変化は縄文人の生活にも大きくかわり、狩猟具では、投げ槍の有舌尖頭器ゆうぜつせんとうきにかわり、すばやい小動物の捕獲に適した飛び道具・弓矢が登場します。さらに、日本列島では約15000年前に最初の土器が出現します。煮る・ゆでるなどの幅広い食品加工が可能となり、主要食料となるドングリなどの堅果類のアク抜きにも用いられます。そして、地面を掘りくぼめたたてあなじゆうきよ竪穴住居が登場し、定住生活が始まります。

約10000年間続く縄文時代（草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に分類）を、米原の遺跡から紐解いていきます。

※C14年代：動植物の遺骸に含まれる炭素14の量から年代を測定する方法

I. 琵琶湖と内湖と川と山 ー縄文人の楽園ー

琵琶湖の南端でみつかった日本最大級の淡水産貝塚・粟津湖底遺跡(大津市)の発掘調査成果から、縄文人の食卓が木の実と魚介類が中心だったことがわかりました。春から夏は魚介類などの水産資源、秋から冬は木の実などの森林資源を利用する四季のくらしがうかがえます。滋賀県の地形は大きく「沿岸部」「扇状地・山間部」「氾濫平野」に分けられます。沿岸部は豊富な水産資源が利用でき、とくに春から夏の産卵期には魚が押し寄せ一網打尽です。「扇状地・山間部」には森林が広がり、秋から初冬には大量の木の実が得られます。河川の資源も利用できますが、その種類と量は琵琶湖に比べると少なく、川魚は素早く動くために大量捕獲は望めません。そして、「氾濫平野」は水産資源にも森林資源にも恵まれません。

米原市の地形をみると、山間部と沿岸部が接し、複合していることがわかります。春から秋は、目の前の琵琶湖や内湖で豊富な魚介類を大量捕獲し、秋から初冬は、裏山で膨大な量の堅果類を採集できます。米原は、一年を通して食料を維持しやすい「縄文人の楽園」なのです。



米原市の縄文遺跡位置図 ※番号は裏表紙の遺跡No.に対応

GALLERY

まいばらの逸品 I. ※スケールは統一していません。



在地の土器(起し又遺跡)



マグロの骨(入江内湖遺跡)



腕輪(入江内湖遺跡)



石棒(吉槻)



釣り針(入江内湖遺跡)



伊吹地域最古の土器(起し又遺跡)



石棒(井の田遺跡)



石棒(起し又遺跡)



石剣と石斧(伊吹遺跡)



石棒(大清水遺跡)



石棒(杉沢遺跡)





土器集合(超し又遺跡)



漆器碗(入江内湖遺跡)



高山寺式土器(礪山城遺跡)



ハツ崎I式土器(礪山城遺跡)



土器棺(杉沢遺跡)



水晶製石鏃(起し又遺跡)



石鏃(伊吹山頂遺跡)



ヒスイ製勾玉
(高番遺跡)



多頭石斧(杉沢遺跡)



石匙(高溝遺跡)



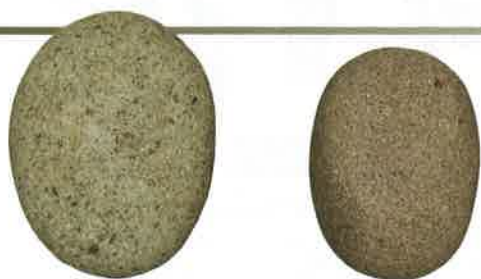
切目石鏃(起し又遺跡)

石斧



石斧(杉沢遺跡)

石刀(杉沢遺跡)



磨石(起し又遺跡)



黒曜石(筑摩田遺跡)



石冠状土製品(杉沢遺跡)



脛節形石器(杉沢遺跡)



御物石器(杉沢遺跡)



(起し又遺跡)



打製石斧(起し又遺跡)



尖頭器(上野水舟)



有舌尖頭器(狐塚遺跡)



有舌尖頭器(霊仙山頂)



黒曜石・打製石斧(井の田遺跡)



II. 滋賀県の縄文遺跡

滋賀県は東を伊吹山地と鈴鹿山脈に、西を比良山系に囲まれ、真ん中に琵琶湖をいづく盆地です。石灰岩や花崗岩、流紋岩からなる山々は、風化作用を受けやすいためたくさんの砂礫となり、琵琶湖に注ぐ川によって長い年月をかけて下流へ運ばれ、湖のまわりに広い平野をつくりました。滋賀県の縄文集落は、湖と山々にはさまれた地理的条件から、①湖水面(海拔84.371m)より低い湖底遺跡。②湖岸や内湖、干拓地などの湿地。③川の広い堤防上などの平野部。④山や丘の上の狭いところ。など独特の立地パターンに分けられます。

i 各時期の様相

■草創期

滋賀県では、この時期に属す可能性のある石器が、表採あるいはのちの時代の遺構に混じって出土しています。唯一、相谷熊原遺跡(東近江市)で草創期終わりごろの竪穴住居群や土器、石器、土偶が出土しています。

■早期

粟津湖底遺跡(大津市)は、琵琶湖の水位が低かった縄文時代には陸地化していたため、早期前葉にはクリ塚が形成されていました。このことから一定期間逗留しながら食料資源を廃棄し続けていたことがわかりました。近接する石山貝塚(大津市)は、早期中葉に遺跡が営まれはじめ、早期後葉の段階で貝塚と大量の土器の廃棄が確認されました。貝層中からは集石遺構、埋葬人骨5体、貝製や骨角製の装身具が出土しています。このほか、赤野井湾遺跡(守山市)でも早期末の集石遺構などが出土しています。

■前期

下鉤遺跡(栗東市)で、近畿や関東、北陸の土器を伴い、貯蔵穴をもつ竪穴住居2棟が検出されています。また石鏃、石錐(きり)、石匙(ナイフ)、磨製石斧、石皿に加え、滑石製管玉や赤色顔料を塗布した耳栓(イヤリング)も出土しました。入江内湖遺跡(米原市)では丸木舟1艘のほか、漆塗り木製椀などが出土しています。

■中期

早期中葉以前は住居をはじめとする遺構の検出例はほとんどありません。この状況は中期後葉になると一変し、起し又遺跡(米原市)では5棟の竪穴住居跡が配石遺構などとともに出土されました。近畿地方各府県でも遺跡数や出土遺物の量が増加し、住居の検出例も増え、貯蔵・埋蔵・祭祀に関連する遺構が出現しはじめます。

■後期

ひきつづき後期前葉も遺跡数と遺物量が多く、正楽寺遺跡(東近江市)では、竪穴住居群、掘立柱建物群、貯蔵穴群などがまとまって確認され、広域におよぶ交易の結果もたらされたさまざまな品物や、関東から九州各地の土器や水銀朱・ベンガラ朱、垂飾(ペンダント)などがみつかっています。また、環状木柱列を伴う広場や配石遺構、屈葬人骨が検出されているほか、祭りに使われた土面・石棒・御物石器が出土しています。

■晩期

後期中葉から晩期前半にかけて遺跡数が減りますが、晩期後半になると再び増加します。ただし、杉沢遺跡(米原市)のような居住区域を伴わない土器棺墓の検出例が大半で、集落はほとんど確認されていません。



相谷熊原遺跡
(東近江市/滋賀県教育委員会提供)



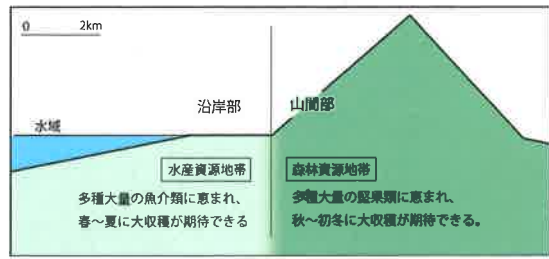
粟津湖底遺跡の第3貝塚
(大津市/滋賀県教育委員会提供)



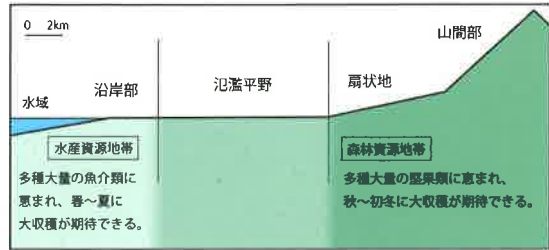
正楽寺遺跡の木柱列跡
(東近江市教育委員会提供)

ii 地形の組み合わせと遺跡分布の変化

滋賀県の縄文人はどのような場所を好んでくらししていたのでしょうか。『縄文人のエコロジーとエコノミー』（財団法人滋賀県文化財保護協会）では、米原市の旧米原町周辺や近江八幡市旧安土町周辺のように、縄文人にとって、食料資源量の季節的変化が小さく、一年を通して食料を維持しやすい「山間部（森林資源地帯）と沿岸部（水産資源地帯）が近接・複合するパターン」を景観Aとしています。そして、森林資源地帯と水産資源地帯の間に資源に恵まれない広大な中間地帯（氾濫平野）が横たわり、旬の食材を求めて季節的に集落を移動するか、何らかの手段を講じなければ、一年を通して必要な食料を維持することが難しいパターンを景観Bとしています。

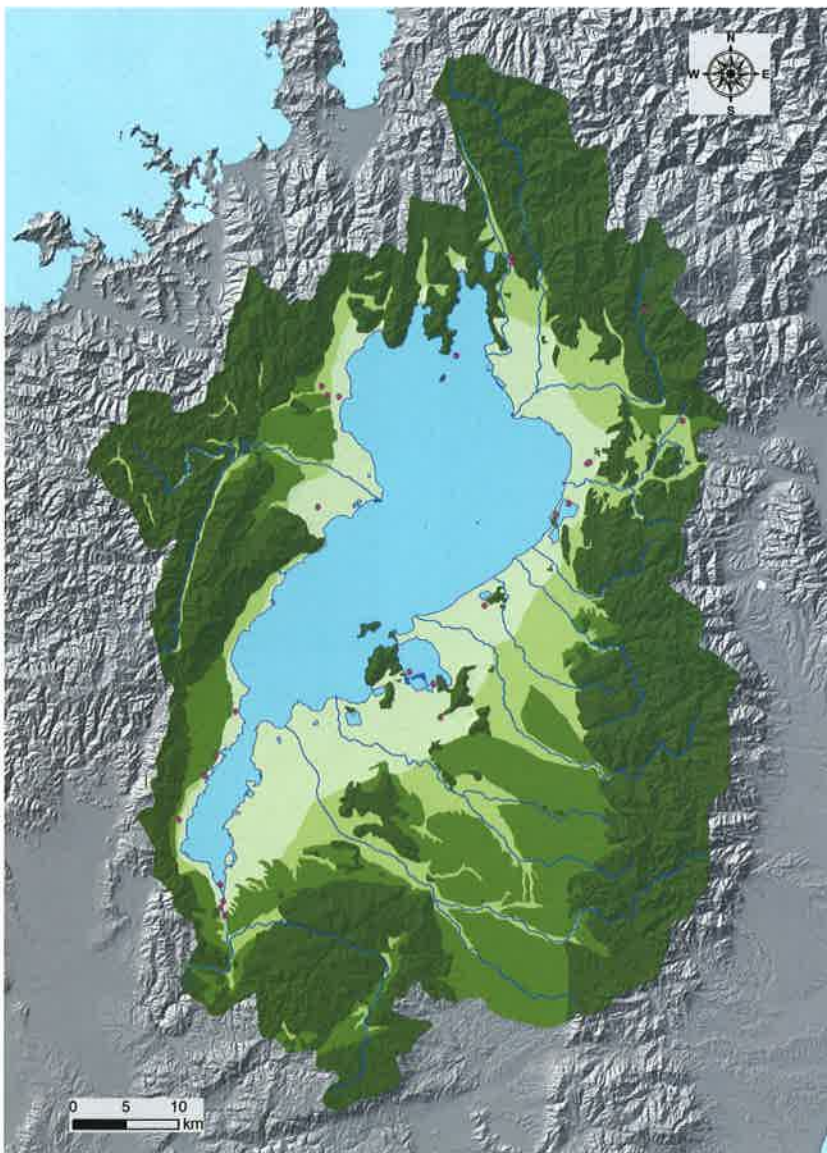


景観A



景観B

(滋賀県文化財保護協会2010を改変)



第1段階の遺跡分布図(作成/瀬口眞司・中村 大)

■第1段階/早期前葉から中葉 (約9000~6300年前)

入江内湖遺跡(米原市)、弁天島遺跡(近江八幡市)、粟津湖底遺跡・石山貝塚・真野城遺跡・滋賀里遺跡(大津市)など、ほとんど全ての遺跡が景観Aに分布します。遺跡分布の傾向から景観Aのメリットに依存して定住をはじめたと考えられます。



滋賀里遺跡の墓域群 (大津市/滋賀県教育委員会提供)



石山貝塚の貝層(大津市/滋賀県教育委員会提供)

■第2段階／早期後葉から中期中葉（約6300～4000年前）

いくつかの遺跡が景観Bでも確認されるようになりますが、ほとんどの遺跡が景観Aにまだ立地しています。基本的には景観Aに依存しながら定住生活を繰り返していた段階と考えられます。一方で、景観Bへの展開は、季節的に定住地を変える(半定住)ことなどで対応し、集落の適応地を広げていったようです。



第2段階の遺跡分布図(作成/瀬口眞司・中村 大)



赤野井湾遺跡
(守山市/滋賀県教育委員会提供)



上出A遺跡出土遺物
(東近江市/滋賀県教育委員会提供)



上田上牧遺跡
(大津市/滋賀県教育委員会提供)

◇コラム 粟津縄文人の四季

春・夏一魚捕りがはじまります。産卵のために岸边に押し寄せてきたウグイやフナ、コイを一網打尽です。セタシジミは秋口まで盛んに採り、土器で湯がいてむき身にしました。

秋一湖のヒシの実を集め終えて、森に入ります。トチの実にはじまり、オニグルミ・クリを拾い集め、晩秋のイチイガシで収穫を終えます。

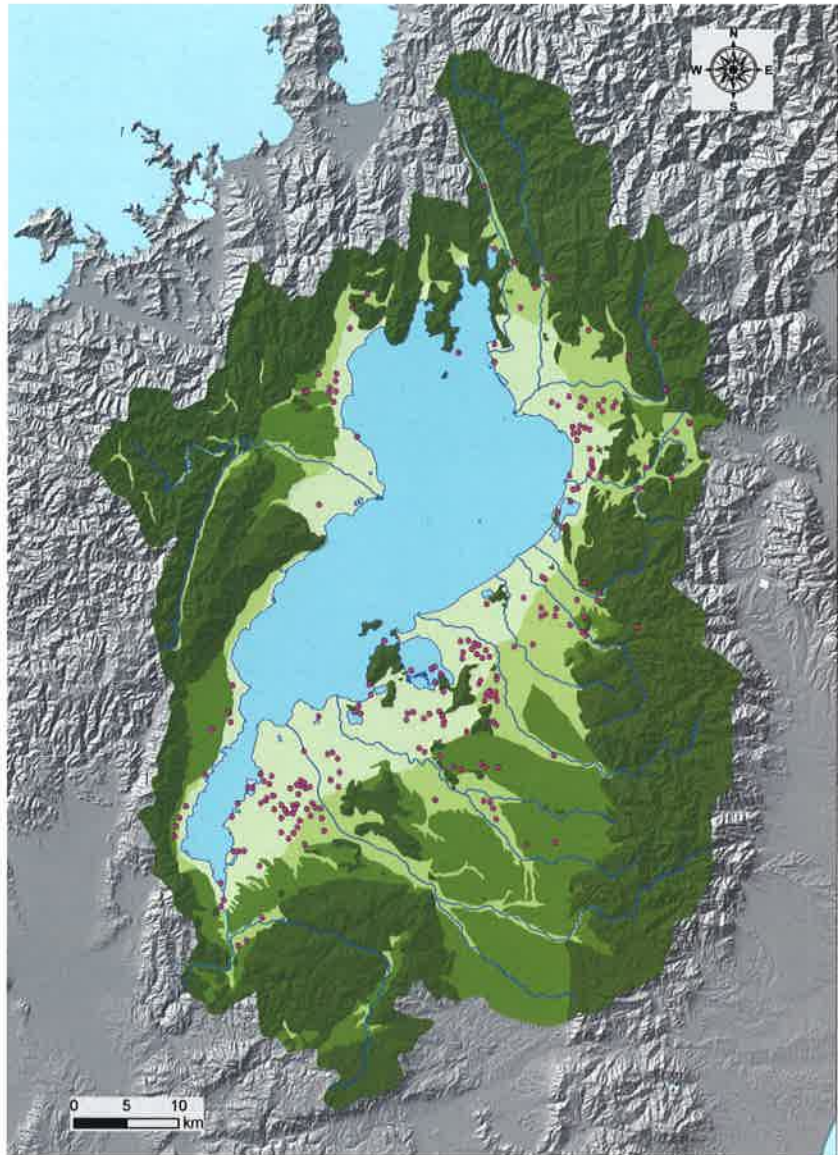
冬一機会があれば狙っていたイノシシやシカの猟に力を入れ直し、木の実の料理で暖まりながら春を待ちます。



粟津縄文人の生業カレンダー
(滋賀県文化財保護協会2010を改変)

■第3段階／縄文時代中期後葉から晩期後半(約4000～2500年前)

分布状況は一変し、多くの遺跡が食料資源の季節的変化が大きい景観Bの扇状地や氾濫平野に立地するようになります。これを支えたのは、食糧貯蔵の活用です。関西地方では木の実の貯蔵穴と考えられる遺構が、第1・2段階の二倍以上に増えます。秋から冬に限られていた木の実の利用が、春から夏にも拡大し、通年的な定住につながります。また、内陸部でも石錘(網のおもり)などの漁撈具が大量に出土し、網などによる河川での漁撈活動が活発になります。さらに、丸木舟や釣り針の出土も増加します。丸木舟によって内陸部から沿岸部への日常的な往来と、秋から冬の沖合での漁撈を可能にしました。



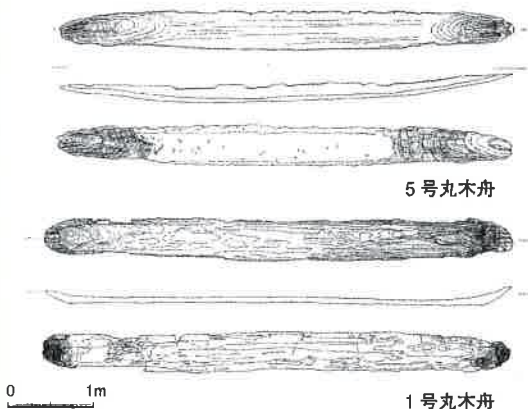
第3段階の遺跡分布図(作成/瀬口眞司・中村 大)



石錘(起し又遺跡)

■琵琶湖の丸木舟

全国で約120艘が出土していますが、琵琶湖でその1/4に相当する30艘が出土しています。第2段階までのものは2艘しかみつかりませんが、第3段階の発見例は28艘に急増します。

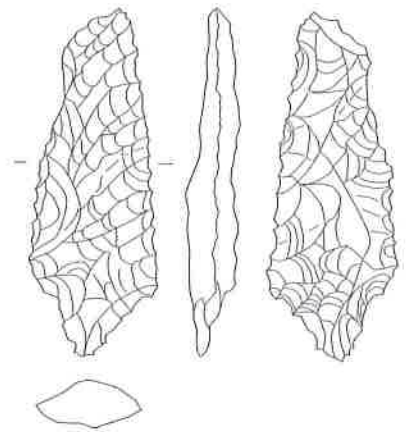
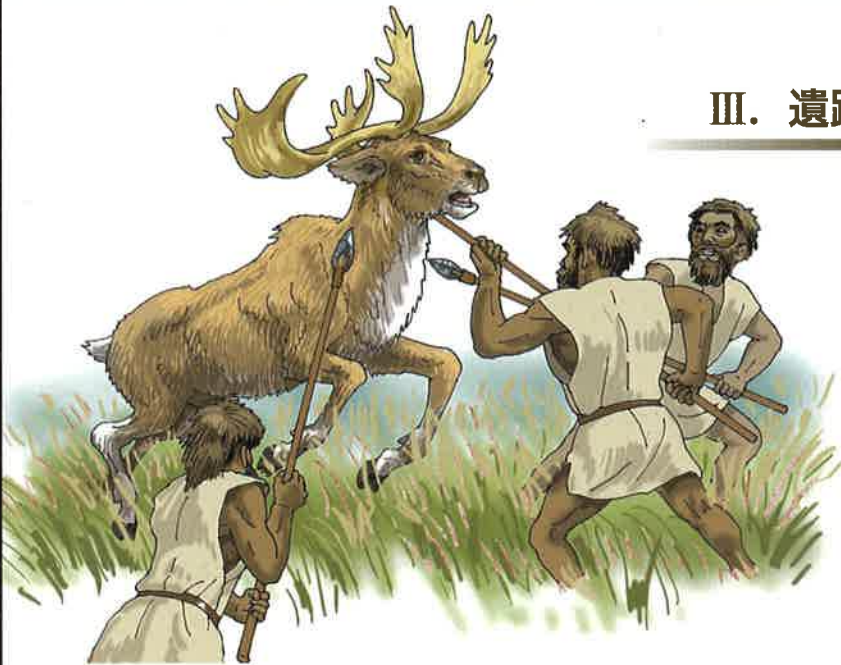


入江内湖遺跡出土丸木舟実測図



六反田遺跡の貯蔵穴
(彦根市/滋賀県教育委員会提供)

III. 遺跡が語るまいばらの縄文文化

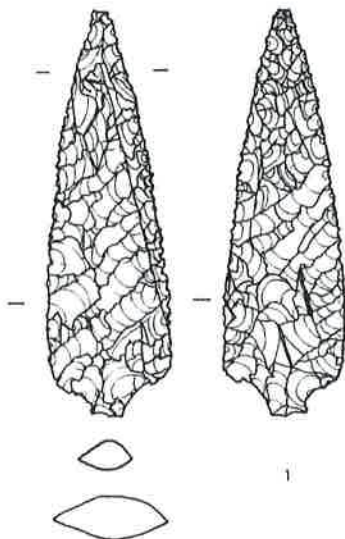


霊仙山頂採集の有舌尖頭器実測図

i 暮らしの始まり ー旧石器・縄文草創期ー

平成28年7月、^{りょうせんざん}霊仙山登山道の保全確認中、山頂手前の鞍部約1000[㍓]地点で、1点の石器が採集されました。縄文時代草創期の小動物を狩るための槍先と考えられる有舌尖頭器で、縄文人が約10000年前に山頂で活動してことがわかりました。灰黒色の粘質感のあるチャート製で穂先を欠きます。

滋賀県内では、草創期の遺物として有舌尖頭器が多く出土しています。米原市内では5点の有舌尖頭器が出土しています。^{おおいぬい}大乾古墳群(上多良)では、^{ほうけいしゅうこうぼ}弥生時代の方形周溝墓群や五世紀末の古墳4基を覆う土層からチャート製の有舌尖頭器が1点出土しました。穂先と舌部末端をわずかに欠きませんが、丁寧に作られています。^{きつねづか}狐塚遺跡(高溝)の資料は、赤紫色系のチャート製で舌部が欠けています。県内の有舌尖頭器にみられる並行剥離はみられず、大型品が多いなかで小型品です。^{たかみぞ}高溝遺跡(高溝)の資料はフチの部分のみに刃の加工が施されています。^{ほうしょうじ}法勝寺遺跡(高溝)でも出土しているようですが詳細は不明です。霊仙山頂と大乾古墳群の資料は草創期の有舌尖頭器ですが、他の3点は所属時期が不確定です。ほとんどが湖岸に近接する標高は85~90[㍓]付近の低湿地遺跡からの出土で、^{みずふね}霊仙山頂約1000[㍓]の出土は県内でも特異です。上野の水舟(小字名)でも、柳葉状の槍先とみられる尖頭器が採集されています。



大乾古墳群



狐塚遺跡



上野水舟

◇コラム 遠い狩人たちの暮らし

霊仙山頂は冬季の積雪が多く、強風が吹き、石灰岩地で水持ちが悪いため、樹木が育ちません。このような厳しい自然環境にポツンと残された有舌尖頭器の来歴を推測してみましょう。相谷熊原遺跡(東近江市)では、石鏃・有舌尖頭器・刃器等の剥片石器が出土しており、その石材は在地産のチャートが最も多く、次いで下呂石、サヌカイトです。報告書では、竪穴建物が断続的に複数回使用されたようで、下呂石やサヌカイトなどの石材獲得地との間で回帰的遊動生活をしていたと想定されています。

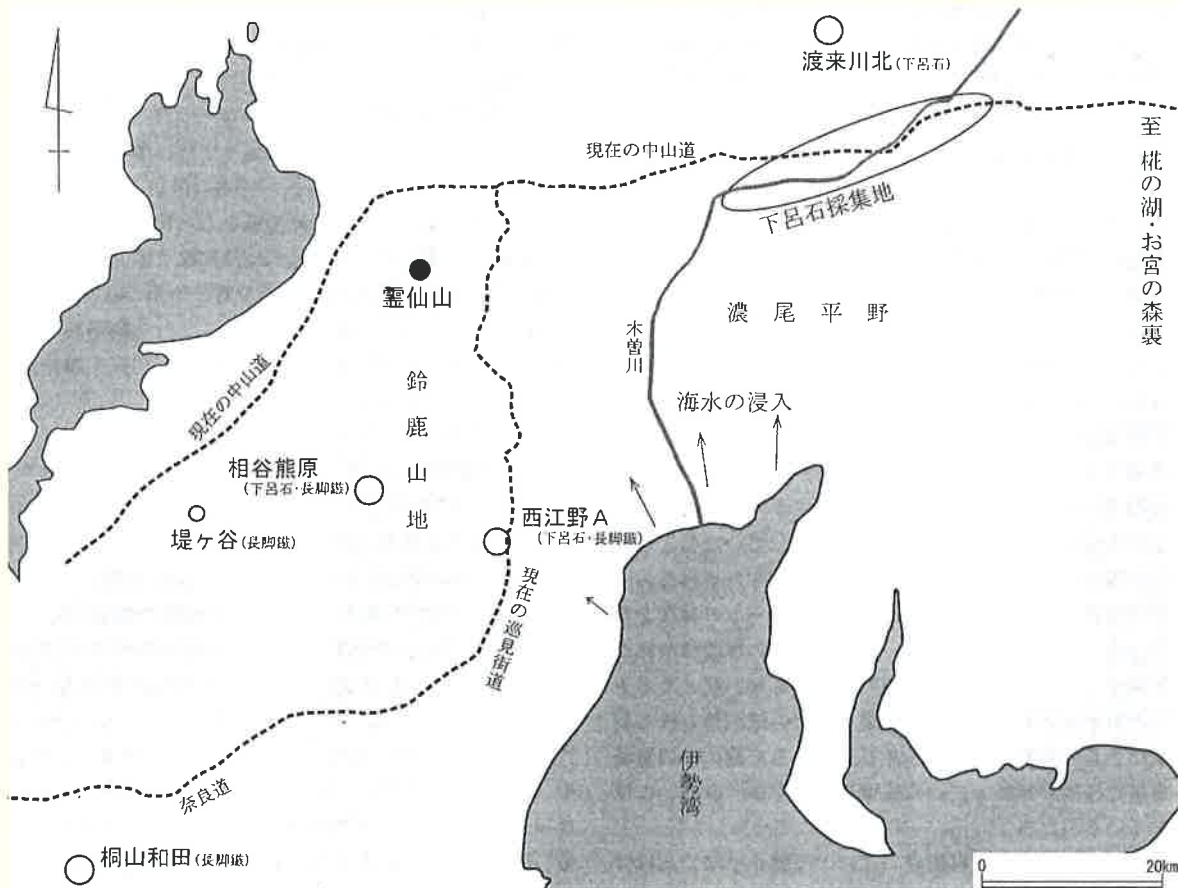
1000年級の鈴鹿の山々は、いまでは滋賀県と岐阜・三重両県の往来を阻む障壁ですが、山間地を活動域としていた草創期の人々にとっては、何ら問題のないものだったのかもしれませんが。その北端にそびえる霊仙山は、山中の移動生活をする集団の格好の狩りの場です。加えて高低差は多様な食料を与えてくれます。山頂の有舌尖頭器は彼らの落とし物なのでしょう。



草創期の土偶
(相谷熊原遺跡/東近江市/滋賀県教育委員会提供)



霊仙山頂の有舌尖頭器と出土地付近



縄文時代草創期遺跡と分布と現在に残る道(重田2017に加筆)

ii まいばらの縄文遺跡の展開

米原市域は東に伊吹山(1377[㍎])を主峰とする伊吹山地と鈴鹿山脈北端の霊仙山(1084[㍎])、西は琵琶湖、北は姉川源流におよびます。山々からは河川によって土砂が運ばれ、上流から湖岸へ扇状地・氾濫平野・^{さんかくす}三角州が形成されています。伊吹山地に端を発する姉川は長浜市を経て琵琶湖に流入しますが、かつては天野川に合流した時期もあったようで、横山丘陵東方の^{おおはらの}大原野はその扇状地とされます。霊仙山中を源とする天野川は、西流しながら氾濫平野をつくり琵琶湖に注ぎますが、最下流に^{いそやま}磯山などの山塊が迫ることから土砂の堆積が遅れ、広大な入江内湖が形成されました。

このような複雑な地理的条件をなす米原市では、縄文時代の全時期を通じて市域全体で遺跡が営まれました。天野川中流域、下流沿岸部、湖岸・湖底、伊吹山麓、姉川上流域、さらに伊吹山頂など、さまざまな立地や出土した多種多様な遺構・遺物は、滋賀県の縄文文化を雄弁に物語ります。

iii 湖辺のくらし

■磯山城遺跡(早期～晩期/磯)

最古の縄文人

縄文時代の全時期の土器が出土しました。なかでも早期の土器の一群は県下でも最古級のもので、^{こうざん}高山寺式土器とよばれる早期の土器は、底が尖っていて一見すると砲弾のような形です。土器の外には全面に米粒のような楕円形の^{もんよう}文様が付けられています。各時期を通じて、東海・北陸・中部山岳地方の特徴をもつ土器や、石器の石材として大阪府二上山産のサヌカイト、岐阜県の下呂石、島根県隠岐島産の黒曜石などが出土していて、縄文時代の交易圏の広さがわかりました。また、早期終りごろの埋葬施設から検出された2体の人骨のうち1体は、仰向きの状態から腰の部分より足をまっすぐに頭部まで曲げるといふ、全国的にも類例がない非常に珍しい屈葬の状態で見つかりました。調査では、明確な集落の跡を確認することができなかったことから、この遺跡は、定住集落というよりは、豊かな自然の幸を求めて営まれた、狩猟・採集のためのベースキャンプ的な遺跡であると考えられます。

(2425)



屈葬人骨



高山寺式土器



八ツ崎I式土器



調査区全景



猪沢式土器(中部高地)

■筑摩佃遺跡(早期～晩期/朝妻筑摩)

北陸から来た人々

いまの地面から約4m下で、縄文時代の沼(河川)の跡が見つかり、早期から後期までの土器や石器がたくさん捨てられていました。その中心は中期のもので、その半数が北陸地方を中心に分布する土器です。さらに、大阪府二上山・香川県金山・北陸のサヌカイトや、長野県霧ヶ峰・東京都小笠原諸島神津島産の黒曜石が出土し、縄文時代から米原市が近畿と北陸、さらに東西交流の接点であったことを物語ります。もっとも注目される遺物に土偶(市指定文化財)があります。土偶は縄文時代だけに製作された祭祀用の土人形で、妊婦の姿が多く、安産や多産、さらに豊穡を願ったとも、災いを除けるための呪術に使用されたともいわれます。皿状の頭部と表情が河童に似ていることから「河童型土偶」とよばれます。富山県を中心に出土しているもので、北陸系土器が目立つことから、この土偶を祀る北陸の人々が米原へ移住してきた集落があったのかもしれませんが。



河童型土偶(米原市指定文化財)



各地から持ち込まれた土器
北陸系陶器



黒曜石



埋甕出土状況(滋賀県教育委員会提供)

■浄蓮寺遺跡(後期/顔戸)

発掘調査で出土した縄文土器はすべて後期初頭のもので、正方形の竪穴住居が1棟検出されています。さらに、住居内に埋設されたと思われる土器(埋甕)が4基、地床炉が2基みつまっていることから、6棟以上の住居があったと考えられます。埋甕はすべて直立して埋設されていて、2基には底部に穴があげられています。同じような埋甕は起し又遺跡(曲谷)でもみつかり、やはり後期初頭のもので、炉跡には焼土がつまっています。動物の焼けた骨や炭化物が出土しています。近接する高溝遺跡(高溝)は前期から晩期の土器が出土していることから天野川下流域の中心的な集落と考えられており、後期初頭のみ浄蓮寺遺跡は、そこから移転した小規模な集落と考えられます。



干拓前の入江内湖(戦前)



5号丸木舟出土状況(丸木舟の写真/滋賀県教育委員会提供)

■入江内湖遺跡(早期～晩期/入江)



1号丸木舟出土状況



2号丸木舟出土状況



3号丸木舟出土状況



4号丸木舟出土状況



入江内湖干拓事業風景

琵琶湖を行き交う丸木舟

入江内湖は、かつて東西2郷、南北2.6郷、周囲8郷の琵琶湖で二番目に大きい内湖でしたが、戦中・戦後の食糧難対策のために昭和19年(1944)から干拓が始められました。発掘調査では、縄文時代早期から平安時代までの大規模な複合遺跡であることがわかりました。縄文時代の出土品は各時期の土器のほか、骨製のモリ・釣り針・石錘など漁撈に関わるものが多くあります。また、低湿地遺跡は水が酸素を遮断し、動物質や植物質資料の酸化を防ぎ、骨角器や木製品が出土しています。なかでも丸木舟は、漁場を沖合まで拵げただけでなく、物資運搬や交流範囲拡大など縄文社会に大きな影響をもたらしました。

水で真空パックされて出土した貴重な資料を紹介します。

①列島最古級の漆器碗（縄文時代前期中葉）

トチノキをくりぬいた素地に、黒色顔料を混ぜた漆を塗り、赤色顔料（ベンガラ）を混ぜた漆で外面と内面の口の部分を飾ります。一本の木から採取できる漆はわずかで、その精製や製作には高度な知識と技術、長い工程が必要です。縄文人の文化的水準の高さを物語ります。

②関西最古級の丸木舟（縄文時代前期中葉）

縄文時代の丸木舟は5艘出土しており、なかでも5号丸木舟は前期前半のもので全国最古級の舟です。モミの木で作った舟で、長さ5.47㍎、幅0.5㍎あります。ほかの4艘は中期末から後期初頭のものです。

③炭化した球根（縄文時代前期中葉）

縄文土器の内面に固着していた炭になった球根で、ノビルなどの仲間だとみられます。縄文時代の植物質食料としては、木の実が知られていますが、球根類も利用していたことがわかります。

④琵琶湖にマグロ（縄文時代早期から後期初頭）

マグロの脊椎骨が1点みついています。海岸地域との交換・交流で食料を入手していたことがわかります。内陸部でマグロ属の骨が見つかった最古級の例です。

⑤関西最古級の釣針（縄文時代中期末）

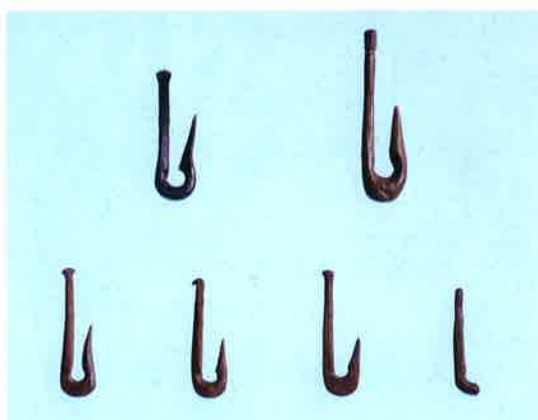
6本出土しました。琵琶湖周辺で早期後葉ごろから発達したおもりを使った網漁に加えて、新しい漁法として釣り漁が導入され、食料として利用できる魚の種類が増えたと考えられます。



トチノ木 黒丸ルシ
口縁 赤丸ルシ



漆器碗・骨角製釣り針
マグロの骨・骨角製モリ
(滋賀県教育委員会提供)



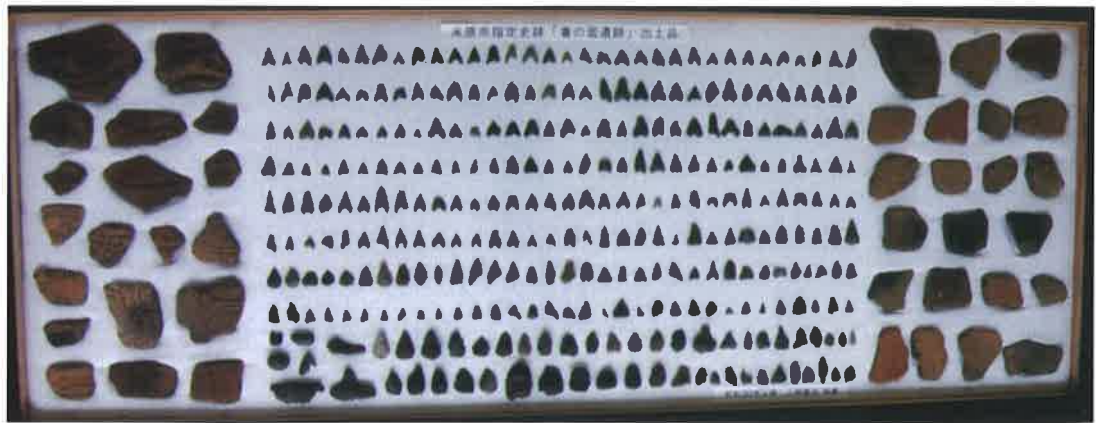
◇コラム 在野の研究者① 磯崎文五郎さん

昭和19年(1944)からの干拓で、入江内湖の広大な湖面が露出すると、全域から大量の遺物が出てきました。しかし、戦中のことであり考古学への関心は薄く多くが捨て置かれました。そのなかで、磯崎文五郎氏(磯)は独学で考古学を勉強し、20代のころから陸地化する過程で熱心に遺物を拾い集めて、遺跡を調べて歩かれました。遺物の分布状況は、西野・明神・丸葎・善積の各地区の全域におよび、遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石斧・古銭・土錘・木製の弓など百余点にのぼります。多くの資料が琵琶湖干拓資料館で展示されています。

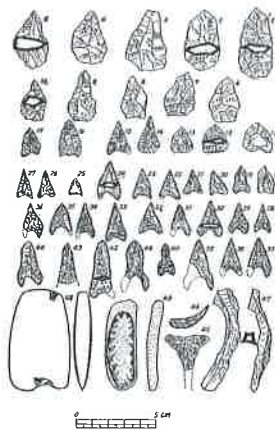


iv 山麓のくらし

■番の面遺跡(中期/梓河内)



個人所蔵の土器・石器
1311



発掘で出土した石器類



2C6m c式

「番の面式」と名付けられた出土土器

靈仙山と清滝山にはさまれた峡谷部の台地上にあります。昭和29年(1954)、畑の開墾で縄文土器の破片30数個が出土し、京都大学考古学教室での鑑定を経て、京都学芸大学(現京都教育大学)が昭和30年7月に発掘調査をおこないました。そして、近畿地方ではじめて縄文時代の竪穴住居跡が見つかり、土器もこの地域の縄文中期末頃を代表するものとして「番の面式」と名付けられました。この地は、東からの文化の門戸にあたり、住居跡は、長野県や岐阜県のものと同構造が似ており、土器も東日本的なもので、信濃・飛騨・美濃との文化的交流をもとに成立していることがわかりました。地元には、遺跡で拾われた石鏃が保管されています。石材は青色・黄色・白色、透明・不透明などカラフルな色のチャートで、大きさや形から細かく8種類に分類できます。わずかな調査面積で、多量の石鏃が出土している遺跡は県内では見当たらず、近辺に良質のチャートの露頭があり、この石材で石鏃を作り、周辺の集落に供給していたようです。



番の面遺跡の現状



竪穴住居跡

GALLERY

番の面遺跡 石鏃コレクション ※スケールは統一していません。色と質感をお楽しみください。





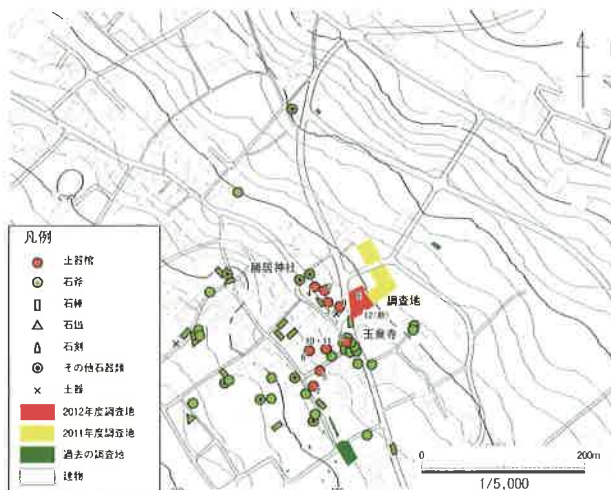
合せ口土器棺出土状況(昭和13年/人物は郷土史家中川泉三)

■杉沢遺跡(中期～晩期/杉澤)

明治以降、杉澤では石器が出土することが知られていました。大正13年(1924)、郷土史家・中川泉三^{なかがわせんぞう}が御物石器と磨製石斧を『考古学雑誌』(13-14)に紹介したことで本格的な調査が始まります。これらの石器を伴う土器の性質を確かめるために、昭和13年(1938)に京都大学の^{こはやしゆきお}小林行雄らによって、北近江ではじめての発掘調査がおこなわれました。調査の結果、2基の縄文時代晩期後半の「合せ口土器棺(甕棺)」を検出し、『通論考古学』や『日本考古学辞典』などに紹介されました。昭和29年(1954)には、京都学芸大学による調査がおこなわれ、合せ口土器棺1基が出土しました。以降、これまでに12基の土器棺が出土しています。晩期前半から終末まで、地点を移動しながら遺跡が長期間継続していることがわかっています。発掘調査はいずれも小規模ですが、出土資料は良好かつ特徴的で、石器類では、石鏃や石皿などの一般的な生活用具のほかに、^{たとうせきふ}多頭石斧や^{せっけん}大小の石棒、^{かつおぶしがた}石剣、^{あわ}鯉節形石器、玉、御物石器などの儀礼的性格の強い石製品が多数出土しています。

■合せ口土器棺(甕棺)

土器には中部山岳地域からの搬入品があります。晩期中ごろから後半の土器棺は東海系の特徴を持ちます。合せ口土器棺は、晩期中ごろに出現し、終末にかけて東海地方に広がった埋葬法で、北近江から岐阜・福井両県を中心に愛知県西部まで分布しており、杉沢遺跡はその接点にあります。



平成15年出土の土器棺

杉沢遺跡の調査地と遺物出土地点
(立命館大学文学部2015)

縄文時代 Q&A

Q 縄文人ってどんな人たち？

A 縄文時代に日本列島に住んでいた人々の総称で、現代の私たちと同じホモ・サピエンスです。地域や時期により違いがありますが、平均身長はやや低く（男性で160㌢前後、女性で150㌢弱）、口を閉じると前歯は上と下でびたりと閉じ、目鼻立ちのはっきりしていた人が多かったようです。磯山城遺跡の縄文人（2号人骨）は男性で、身長165～174㌢くらいと推定されているので、縄文人としては長身です。



磯山城遺跡・人骨出土状況



Q 寿命はどのくらい？

A のこされた骨などからは、およそ30歳くらいではないかともいわれています。ただしこれは、生まれてすぐ、あるいは成人前に死んでしまう赤ちゃんや子どもが多かったことも関係していて、実際は50歳や60歳の人もありました。磯山縄文人は40歳代と推定されています。また、杉沢遺跡の合せ口土器棺は、幼くして亡くなった子どもの再生を願って、埋葬されたともいわれています。

Q 縄文時代の人口は？

A 縄文遺跡が全部掘り返されているわけではなく、発掘された遺跡でも、一度に建っていた家の軒数を出すことは難しく、一軒の家は何人住んでいたかも正確にはわかりません。ただし地域や時期によって大きな増減があったことは、遺跡の数や密度から予想されており、長野県の八ヶ岳^{やっがたけ}周辺では、中期後半に人口増加のピークがあったと、多くの研究者は考えています。米原市の縄文遺跡も中期の後葉ごろに、内陸部や扇状地、山間部で集落が営まれはじめます。



起し又遺跡



河童型土偶の頭部

Q どんな服を着ていたの？

A 土偶の様子が服装を表現しているという考えや、さまざまな織物がみつまっていることから、服を着ていたことが想像されます。寒い冬は毛皮を着ていたのでしょうか。筑摩伊豆遺跡の土偶の河童のような頭は、当時のヘアースタイルを表現しているのでしょうか。

Q どんな家に住んでいたの？

A いちばん多いのは竪穴住居と呼ばれる家で、通常面積はおよそ20～30平方㌢で、地面を数10㌢からときには100㌢近く掘り下げ、木の柱を立てて、上屋でおおう構造です。番の面遺跡や起し又遺跡、浄蓮寺遺跡でみつかっています。番の面遺跡のものは四角形の4本柱、真ん中に炊事をする炉が作られており、長野県などの住居跡の影響がみられます。起し又遺跡では石で組んだ複式の炉がみつかっています。



Q 発掘はなぜするの？

A 発掘調査には、大きく分けて2種類あります。ひとつは学術的な発掘調査で、これは大学等の研究機関が、ある目的のために狙いを定めておこなうもので、最後に紹介する立命館大学による杉沢遺跡の発掘調査がこれにあたります。もうひとつは緊急発掘とか記録保存とよばれるもので、遺跡の上に道路や建物を建設したり、土地の改良などをおこなう前に発掘調査をするものです。そうしないと、遺跡は破壊され失われます。紹介した多くの遺跡は緊急調査によるものです。

v 姉川上流の暮らし

■ 起し又遺跡(早期・中期～晩期/曲谷)



調査区風景



竪穴住居跡



埋め壘



伊吹山麓の土器



各地の土器



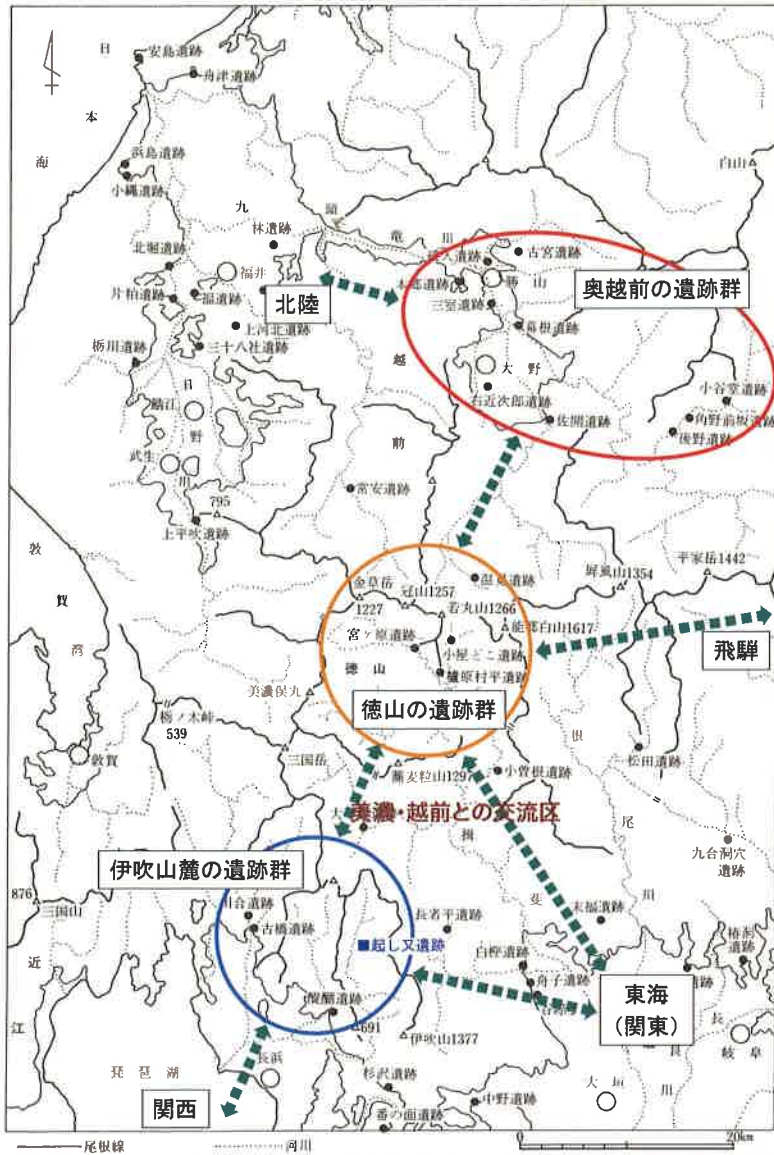
検出遺構図

縄文文化、西への玄関口

姉川の最上流域の支流・起し又川が作り出した標高約425mの段丘上に営まれた遺跡です。手が届くほど近くに岐阜県境の尾根が見えます。調査では、5棟の竪穴住居のほか、柱状の石を添えて土器を埋設した遺構、円礫を並べた配石遺構など、縄文時代の生活や精神文化をうかがわせる遺構群が発見されました。出土した土器には、早期や晩期の土器もあり、縄文時代を通じて断続的に人々の活動があったようです。とくに中期後葉から後期前葉には、東海・中部・西関東や近畿・瀬戸内の土器群と、伊吹山麓の在地の土器が入り交る複雑な様相をみせます。この時期、伊吹山地周辺には、醍醐遺跡や古橋遺跡(ともに長浜市)のように、起し又遺跡と同じような土器や石器、配石遺構を伴った集落が営まれており、ひとつの文化圏があったようです。

■峠道を使った交流

この地域は近代にいたるまで、峠道を利用して岐阜県や福井県と通じ、日本の東西を結ぶ重要な位置にありました。姉川上流山間部は、東からの文化が近畿地方へ流入するときの窓口的役割を果たしながら栄え、起し又遺跡は、まっさきにこれを受け入れた集落です。



美濃・越前との交流(徳山村の歴史を語る会1984年に加筆)



近江と美濃を結ぶ近代までの峠道(成安造形大学作成)



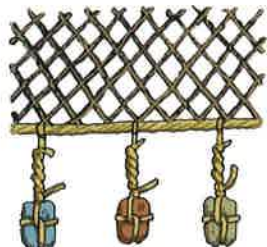
石組複式炉跡

■川での魚捕りと石組炉

起し又遺跡や醍醐遺跡、古橋遺跡からは、石錘とよばれる漁網の石のおもりがたくさん出土し、盛んに川魚漁がおこなわれていたことがわかります。また、住居跡からは、トチのアク抜きに使う灰をためた可能性のある石組みの炉跡がみついています。トチを加工する技術と、石錘を使った漁撈技術の確立が、山間の縄文集落を支えていたと考えられます。



切目石錘出土状況



切目石錘使用状況イラスト



石組複式炉イラスト



山頂で採集された石鏃



線刻石剣(伊吹遺跡)
(滋賀県教育委員会提供)



大型石棒(杉沢遺跡)

vi 伊吹山への祈り

伊吹山の山頂では、昭和12年(1937)に縄文時代の石鏃が5点拾われたのを皮切りに、測候所の職員や山小屋の経営者によって、これまでに14点をこえる石鏃と1点の石のナイフ、石を割ったくずがみつかります。山頂には窪地や湿原があり、伊吹山の鳥獣が集まる猟場だったのかもしれませんが。平成18年(2006)には、四合目でも石鏃がみつかり、山麓の縄文人が盛んに山に登っていたようすがうかがわれます。一方で、全国の高山の山頂近くから石鏃や土器が出土した例があります。比叡山^{ひえいざん}や白山、八ヶ岳、富士山などでみつかり、いずれも伊吹山のようにとても美しい姿をした山です。もしかしたら、石鏃は狩りの落としものではなく、山への原始的な信仰をあらわす遺物かもしれません。

伊吹山麓の遺跡からは、不思議な石器がたくさんみつかります。石棒は縄文人の祈りの道具で、中期のものは大型品、晩期になると小型で薄くなります。雄大な伊吹山を眺める杉沢遺跡は、山麓の中心的な集落で、たくさんの石棒がみつかります。大型石棒は折れています、復元すると1畝近くになる県下最大のものです。大型の石棒は広場などに立てられ、狩猟に関わるまつりや成人儀礼に用いられたという説があります。男性器に似ていることから子孫繁栄の祈りの道具ともされます。山の恵みと、生命の源である水、ときには自然災害など人間ではどうしようもない脅威をもたらす伊吹山への感謝と畏怖の祈り、そんな祭祀がおこなわれていたのではないのでしょうか。



石棒のまつり想像図

◇コラム ヤマトタケルと縄文の神々

「この白猪は神の使者であろう。
今殺さずとも帰る時に殺そう」

神話の英雄ヤマトタケルはそう大言します。怒った伊吹山の荒ぶる神は、白い大猪(古事記)あるいは大蛇(日本書紀)に化身して、タケルに氷雨を浴びせ、死に至らしめます。大雪・大風・大雨をもたらし、まつろわぬ東国への入口に聳える伊吹山を、古代人は英雄物語の終焉の舞台に設定しました。奈良時代に編さんされた二大歴史書は、伊吹山の神を明確にイノシシとヘビと記しています。キツネ(稲荷神社)やシカ(春日大社)、サル(日吉大社)のような「神の使い」ではなく「神」そのものです。タケルはこれを神の使いとみあやまり、悲劇的な結末を迎えることになりました。

なぜイノシシとヘビが伊吹山の神なのでしょう。縄文時代の深鉢形土器を飾る人面や土偶にみられる女神の鼻は圧倒的にイノシシ鼻が多く、そのものが付くこともあります。さらに、イノシシの顎の骨を石で特別に覆ったり、並べて出土した例は縄文時代中期から弥生時代後期ごろまでみられます。イノシシ型の土製品は東日本の縄文後・晩期に多くみられます。イノシシが神として祀られるのは、4~5頭の子どもを産む多産性にあります。土器や土製品には、子孫繁栄や豊穡などの意味が込められています。農耕社会になると子だくさんは豊作祈願に転じます。ヘビはどうでしょう。男根状の頭部、脱皮を繰り返して生命が更新する不思議さ、とぐろを巻く姿は円錐形の美しい山容に見立てられて山の神となりました。農耕社会では野ネズミの天敵として稲作の神に転じ、仏教と結びついて龍になり、天に昇って「水の神」となりました。伊吹山の神は、田畑を潤す大河の源の水神である一方、その厳しい気候や立地から、奈良時代にあっても、縄文時代以来の自然の霊威を現したイノシシやヘビの姿でタケル神話に登場するのです。



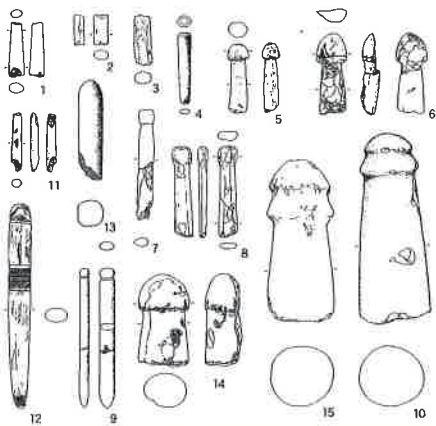
伊吹山頂に祀られる白いイノシシ像



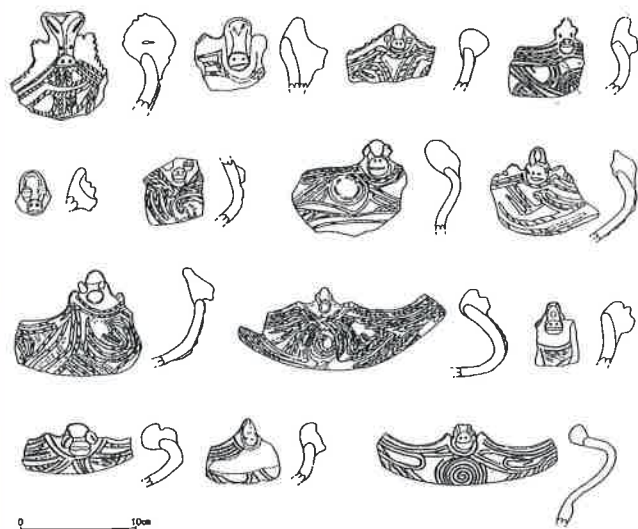
日本武尊(やまとたけるのみこと)像
(泉亮之作/大正9年/上野区蔵)



長野県尖石遺跡の蛇裝飾土器
(茅野市尖石考古館1986)



伊吹地域出土の石棒・石剣実測図
(1~10杉沢遺跡、11起し又遺跡、12伊吹遺跡
13高番遺跡、14井の田遺跡、15大清水遺跡)



長野県中原遺跡の猪裝飾土器(新津 健2011)

IV. まだまだあるよ、まいばら縄文1万年

入江内湖の縄文人は、丸木舟で内湖から琵琶湖に漕ぎだし、内湖背後の里山に入り、ときに天野川をさかのぼって伊吹・霊仙の深山に分け入る。くりかえしますが、琵琶湖、内湖、川、里山、深山が直結する米原の地は、県内でもいち早く開かれた場所で、磯山城遺跡(磯)、入江内湖遺跡(入江ほか)、法勝寺遺跡(高溝)など湖岸の遺跡では全時期を通じて土器や石器、木器などが出土しています。市内の縄文時代は、早期の中葉頃から本格的に始まります。姉川上流山間部でもわずかにこの時期の土器が見つっていますが、早期から前期、中期前葉までは、筑摩佃遺跡(筑摩)、高溝遺跡(高溝)など琵琶湖岸が生活の拠点です。しかし、中期中葉以降、山麓や山間部、内陸部でも遺跡数が急増し、瀬戸内・東海・北陸・中部山岳地帯や関東など各地の土器が持ち込まれ、石剣や土偶といった精神的な遺物が出土するなど、後期前葉までもっとも成熟した時期を迎えます。

晩期には、山麓で杉沢遺跡(杉澤)が栄えるものの、高溝遺跡、顔戸遺跡(顔戸)、世継遺跡(世継)など、湖岸の低湿地の自然堤防上に活動の場を移し稲作社会が到来します。

i 草創期・早期

■東野遺跡(早期/弥高)

伊吹山麓の弥高川が形成した扇状地の扇頂部にある遺跡で、早期に伴うことが多いトロトロ石器(異型局部磨製石器)が採集されています。隣接する上野の水舟では、草創期の槍先とみられる尖頭器が採集されています。

■狐塚遺跡・法勝寺遺跡(早期～晩期/高溝)

湖岸近接地の遺跡群で、早期前葉の土器や早期末の押型文土器とそれに伴う石器・有舌尖頭器などが出土しているほか、全時期の土器がほとんどみられます。



トロトロ石器



石匙(高溝遺跡)

ii 前期

■高溝遺跡(前期～晩期/高溝)

前期前葉から後期前葉(中期前葉を除く)、晩期後半の土器とともに、時期不明ながら耳栓(ピアス)や各種石器が出土しています。



粕淵辰次コレクション

◇コラム 在野の研究者② 粕淵辰次さん

粕淵辰次氏は、明治36年(1903)、高溝に生まれ、農業のかたわら考古資料を採集され、昭和12年(1937)に京都大学の小林行雄氏に所蔵石器の鑑定を受けてから、考古学に熱中されました。資料1点1点に、採集された場所と年月日などが正確に記録されています。また、自宅の一室を解放され、多くの研究者にこころよく資料を提供されるなど、近江の考古学の発展に寄与された功績は多大なものがあります。資料の点数は326点を数え、そのほとんどが高溝で採集された遺物です。縄文時代から中世におよぶもので、質量ともに多岐にわたります。資料のなかには、縄文の古い時期の局部磨製石斧、中部地方産の石材を用いた大型の石匙、祭器と思われる有孔磨製石鏃などがあります。

iii 中期

■伊吹遺跡・峠平遺跡(中期～晩期/小泉)

伊吹山地を南流してきた姉川が平野部に出る位置を見下ろす広大な土石流段丘上に展開しています。伊吹遺跡では縄文中期から晩期の土器とともに、蛇紋岩製の精製磨製石斧や線刻石剣が出土しています。石剣は県内でも類例をみない優品で、祭祀に関わる道具と考えられ、このような遺物を出土することからこの地域の中心的な集落と考えられます。峠平遺跡でも粘質感のある緑色系の石材を用いて丁寧に仕上げられた小型の磨製石斧が採集されています。



小型磨製石斧
(峠平遺跡)



線刻石剣と磨製石斧(伊吹遺跡)

■井の田遺跡(中期・後期/大清水)

伊吹山麓の弥高川と政所川が形成した複合扇状地の扇頂部にあります。中期後葉を中心に、わずかに後期中葉から後葉の土器が出土しました。近世には東海につながる北国協往還ほっこくわきおうかんが通っており、縄文土器も東海系とうかいけいのものが主体です。さらに、バチ型の打製石斧、中型石棒のほか、希少品として搬入された黒曜石片が出土していて、山麓中期の中核的な集落と考えられます。



東海系の土器群



黒曜石・打製石斧



石棒(井の田遺跡)

iv 後期

■内座遺跡(後期・晩期/上板並)

姉川上流では、現在の集落より1段高い段丘上に縄文遺跡が点在します。内座遺跡からは後期前葉・中葉、晩期前葉・後葉の土器が出土しました。



内座遺跡出土土器



伊吹・峠平遺跡がある姉川を望む高台



姉川高位段丘上の内座遺跡近景



伊吹山麓扇状地扇頂の井の田遺跡近景

v 晩期

■法泉寺遺跡(晩期/本郷)

晩期前半の砲弾型をした尖底土器が4個体出土しています。遺構の詳細は不明です。

■三大寺遺跡(晩期/枝折)

晩期後半の合せ口土器棺が1基みついています。



上段:杉沢遺跡
下段:三大寺遺跡
下段左右:法泉寺遺跡

用語の解説

【有舌尖頭器】

縄文草創期中ごろにみられる石器で、根元に舌状の莖があることからこの名があります。槍の先につける穂先とされます。

【貝塚】

縄文人が捨てた貝殻が積み重なったもので、獣や魚などの骨や、破損した土器、骨角器などが出土し、人や犬が埋葬されていることがあります。

【氾濫平野】

何度も洪水が繰り返され、上流から土砂が堆積してできた平らな土地をいいます。

【集石遺構】

小石が集められている遺構で、加熱された痕跡などがみられる場合は、調理をおこなったあとだとされます。

【配石遺構】

石を人為的に配置したもので、環状列石や配石墓などがあり、祭祀や埋葬に関連する施設と考えられています。

【環状木柱列】

円を描くように巨木の柱を配置した祭祀施設で、正楽寺遺跡では内部に大きなたき火の跡がありました。

【御物石器】

宮中に献上されたのでこの名があります。中央片方よりにくびれた部分があります。岐阜県で集中的に出土しますが、用途は不明です。

【合せ口土器棺(甕棺)】

2個の甕型土器の口を合わせた埋葬施設で、縄文時代晩期には幼児を納めるのに用いられました。

【黒曜石・サヌカイト・下呂石】

黒曜石は十勝岳、長野県和田峠、伊豆、隠岐、大分県姫島などで産出します。サヌカイトは大阪府二上山や香川県金山が有名です。岐阜県の下呂石は、溶岩が固まったガラス質の流紋岩です。

【異型局部磨製石器(トロトロ石器)】

石鎌の形をしていますが、先端が丸くなっていることから実用品ではなく、祭祀に関連する石器とされます。表面が磨かれて溶けているようにみえます。

V. まちづくりと縄文遺跡 —立命館in杉澤—

平成23・24年度および平成29・30年度、立命館大学が杉沢遺跡で学術調査をおこないました。縄文遺跡の中心部は現在の杉澤集落の中心部と重なっています。縄文時代の遺跡の上に、現代の生活が営まれているわけで、遺跡に対して住民の関心は非常に高いです。

杉沢遺跡は縄文中期末ごろから遺物が散見され、縄文晩期には集落を継続的に営んでいたことがわかっています。その後、弥生時代から古墳時代前半には、集落が営まれた形跡はなく、おそらく、水田を作るのに適した場所、より琵琶湖に近い低地に移動していたと考えられます。しかし、古墳時代後期から現代にいたるまで、遺物が断続的に出土します。集落の盛衰が繰り返されたにせよ、基本的には1500年間程度、集落が継続していたとみられます。

このような長期におよぶ集落の継続性には理由があります。杉沢は伊吹山麓の政所川・弥高川などが形成する扇状地の末端にあり、地下の伏流水ふくりゅうすいが地表に湧き出る場所にあります。いまでも集落中心の勝居神社かちいで湧き水わみずをみることができます。この清水が集落を継続させたおおきな要因です。

平成23・24年度の調査で、縄文時代終わりごろの土器や蛇紋岩という日本海側に産地がある岩石で作られた石斧が出土しました。また、縄文時代終わりの墓1基と木の実の貯蔵穴2基がみつかりました。木の実はトチノキやクリが主に食べられていたことがわかりました。土器の粘土の砂粒を調査したところ、約10キロ離れた姉川上流の曲谷付近の川砂を使っているという予想外の発見もありました。平成29年度は美術家の横谷奈歩さんと共同で、発掘作業と同時進行で遺物の出土位置を再現展示しました。これは日本では（おそらく世界でも）初めての試みです。平成30年度の地中位置再現展示は伊吹山文化資料館企画展で実施しています（3月）。発掘では江戸時代終わり頃の杉の板を敷き三和土（たたき）で固めた珍しい便槽が出土しました。杉沢遺跡では縄文時代から現代まで、弥生時代以外の遺物がすべて見つかっていて、ずっと人が暮らしていた場所であることがわかりました。



蛇紋岩製磨製石斧(平成23年)



縄文時代の木の実(平成23年)



縄文時代の木の実が出土した穴
(平成24年)



出土品の地中埋没状況再現展示
(平成29年)



伊吹山中学校発掘体験(平成30年)



19世紀半ばの便槽(平成30年)

■地域・子どもたち・学生 — 縄文遺跡とくらす・活かす —

立命館大学の調査にあたって、杉澤の人々は物置を休憩所に提供し、トイレを開放し、ころよく水道水の提供をしていただきました。野菜が収穫できる夏場で、余剰の作物を差し入れていただき、学生たちの夕食を彩りました。さりげなく発掘を気にしていただいた区民もみかけました。このような関わりは、発掘調査の活性化につながり、学生たちが集落を歩く声は、ひと夏の賑わいをもたらしました。お盆の夏祭りに学生がスタッフとして準備や催し物に参加し、発掘状況が紹介されました。会場の勝居神社は、道をはさんで杉沢遺跡に隣接しています。身近な場所に縄文遺跡があり、地域の人々に周知する良い機会となりました。

立命館大学発掘調査団には、米原市内の子どもたちや、学区の春照小学校^{すいじょう}5・6年の発掘体験にも協力いただき、実際に手ガリや移植ゴテを用いて、なかには同伴のご家族と一緒に夢中で掘る児童や、居残りして夕方まで作業をおこなう熱心な児童もいました。普段の生活では触れることのない「考古学」や「遺跡」を肌で感じ、興味関心が芽生えるきっかけになったのではないのでしょうか。また、指導いただいた学生にとっては、人々に伝えることの難しさを実感し、今後の励みになったと思います。このような活動は、今後の遺跡の保存と周知、遺跡を活かしたまちづくりにつながっていくことが期待されます。



発掘調査風景(平成23年)



地元児童の発掘体験(平成23年)



発掘体験(平成29年)



宿舎での整理事業(平成23年)



杉澤夏祭り(平成30年)



杉澤夏祭り(平成30年)

VI. 「まいばらの縄文」に会える施設

■米原市伊吹山文化資料館

常設展示室4「掘り起こされた伊吹の歴史」コーナーでは、起し又遺跡と杉沢遺跡を中心に、御物石器・線刻石剣・大小の石棒など祭祀の道具など、"県内一の質量を誇る"伊吹山麓の縄文時代の資料が展示されています。

所在地／米原市春照77番地

電話・ファックス／0749-58-0252

休館日／毎週月曜日（祝日の場合は翌日）、祝日の翌日、

12月27日～1月5日

観覧料／一般200円(20名以上団体160円) 中学生以下100円(同左80円)

※市内の子どもの学習利用は無料 ※()内は20名以上の団体利用



■琵琶湖干拓資料館

昭和54年、入江内湖遺跡を中心に県内の内湖遺跡出土の遺物を展示、保管するために設立されました。縄文時代の資料として、早期に属する底の尖った土器や、石棒・凹石・磨石・石鏃、骨製のモリなどがあります。大中の湖（近江八幡市）の干拓で出土した縄文土器もあります。

所在地／米原市入江522番地3
電話／0749-52-0763（入江土地改良区）
休館日／土曜日・日曜日・休祝日・年末年始
入館料／無料



VII. 参考文献・協力者一覧

《主要参考文献一覧》

植田文雄2000『縄文人の淡海学』サンライズ出版

財団法人滋賀県文化財保護協会

2010『縄文人のエコロジーとエコノミー 琵琶湖の貝塚・粟津湖底遺跡が語る秘密』

滋賀県教育委員会2012『縄文人の祈りと造形』

滋賀県立安土城考古博物館

2012『『人』・『自然』・『祈り』共生の原点を探る 縄文人が語るもの』

重田 勉2017「縄文時代初期の移動とルートについて」『紀要』30（公財）滋賀県文化財保護協会

高橋順之2017「縄文時代の伊吹山麓」『伊吹山を知るやさしい山とひと学の本』

伊吹山ネイチャーネットワーク

茅野市尖石考古館1986『尖石考古館図録』

徳山村の歴史を語る会1984『徳山村のあけぼのをもとめて』

瀬口眞司2000「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 地域の検討5」

『紀要』13（公財）滋賀県文化財保護協会

瀬口眞司2009『縄文集落の考古学 西日本における定住集落の成立と展開』昭和堂

瀬口眞司2016『琵琶湖に眠る縄文文化 粟津湖底遺跡』新泉社

新津 健2011『猪の文化史 考古編』雄山閣

藤森英二2017『信州の縄文時代が実はすごかったという本』信濃毎日新聞社

米原市教育委員会2013『北近江考古学事始め 一地域史を語り続ける埋蔵文化財一』

立命館大学文学部2015『滋賀県米原市杉沢遺跡発掘調査報告書 一2011・2012年度の調査一』

《協力者一覧》

明日一史・小竹志織・瀬口眞司・谷口徹・畑中英二・矢野健一・渡邊勇祐

滋賀県教育委員会・（公財）滋賀県文化財保護協会・

滋賀県埋蔵文化財センター・滋賀県立琵琶湖文化館・

東近江市教育委員会

まいはらの縄文に
会いに来てね！！
まっています。



米原市の縄文遺跡 一覧

	遺跡名	所在地	概要
1	起し又	曲谷	①縄文早期徳谷式。②縄文中期船元式ⅠB・Ⅱ・Ⅲ式、里木Ⅱ式、北白川C式。 ③中津式、福田KⅡ式、北白川上層Ⅰ～Ⅲ式、元住吉Ⅰ・Ⅱ式。主体は②の北白川C式。
2	ムカイラ	曲谷	不詳。
3	内座	上板並	①中津Ⅱ式、北白川上層Ⅱ式、元住吉山式、②滋賀里Ⅲ式、馬見塚式。主体は①の中津式。
4	長谷	上板並	①石斧。
5	太平寺	太平寺	不詳。
6	伊吹	小泉	①縄文中期船元式。②蛇紋岩製の精製磨斧（長さ3寸5分）、緑泥片岩製の線刻石剣。
7	峠平	小泉	①石斧。
8	伊吹山山頂	上野	不詳。
9	上野	上野	不詳。
10	野頭	上野	不詳。
11	人塚	上野	不詳。
12	東野	弥高	①異型局部磨製石器が採集されている。
13	高番	高番	①縄文に帰属すると考えられている硬玉製勾玉、石棒、敲石、石鏃、石斧。
14	杉沢	杉沢	①中期後葉の土器。②滋賀里Ⅱ式期の中部山岳からの搬入土器、敲石、磨石、石皿、石刀、硬玉類似石材の磨斧、石冠状土製品。剥片石器の石材は安山岩、サヌカイトのほか、下呂石に類似する。③晩期後半の土器棺墓群、石斧、石鏃、敲石、石棒、多頭石斧、御物石器。
15	村木	村木	不詳。
16	井の田	大清水	①咲畑式、神明式、取組式、島崎Ⅲ式、山の神式、里木Ⅱ式、北白川C式、打製石斧、黒曜石剥片。 ②北白川上層式。
17	大清水	大清水	不詳。
18	上平畑	上平寺	①石斧。
19	上平寺	上平寺	不詳。
20	番の面	梓河内	①縄文中期末の竪穴式住居。方形プランで一辺4m。4本の主柱穴、中央の炉をもつ。石鏃のほか多量の石鏃が出土。その大半はチャート製であるが中部山岳産の黒曜石製も混じる。ほか三日月状石器、小形砥石あり。
21	法泉寺	本郷	①滋賀里Ⅲ式土器。
22	岩井	能登瀬	不詳。
23	埋塚	箕浦	①縄文時代に帰属する可能性の高い小形の石棒(?)。
24	船崎山古墳群	船崎	多量のサヌカイト剥片の散布あり。石器製作地と推定されている。
25	狐塚	高溝	①大川式とそれに伴う石鏃・石匙。また有舌尖頭器も出土。②直径10cmの石棒。 ③弥生前期新段階の土器。
26	法勝寺	高溝	①大川式、高山寺式、有舌尖頭器。②北白川下層ⅡB式。③船元Ⅲ式、勝坂式。④後期の磨消縄文土器。 ⑤晩期条痕文土器。
27	高溝	高溝	①羽島下層式、北白川下層式、諸磯B式。②船元Ⅲ・Ⅳ式、里木式、炉畑式。③中津式、福田KⅡ式、北白川上層Ⅱ式。④船橋式、馬見塚式。そのほか土器片鏃、耳栓、有舌尖頭器、石鏃、石匙、敲石や剥片類が出土しているが、その帰属時期や素材については不詳。
28	顔戸	顔戸	①北白川下層Ⅱb式、大蔵山式。②船元式、里木式。③中津式。④馬見塚式。
29	浄蓮寺	顔戸	①中津Ⅰ式新段階、称名寺Ⅰ式C類、竪穴式住居、埋設土器、地床炉、石皿、礫石鏃（剥片石器はない）。埋設土器は4基で屋内型と推定。地床炉は2基。このことから住居は6棟以上で単一型式内での回帰的な移動が考えられている。住居プランは正方形、5m四方。②突帯文土器。
30	黒田	顔戸	①滋賀里Ⅳ式、船橋式、磨石、凹石、石棒状石製品（石棒?）。
31	山ノ前	顔戸	不詳。
32	一本木	顔戸	多量の剥片の散布あり。石器製作地と推定されている。
33	土川湖底遺跡	長沢	不詳。
34	世継	世継	①滋賀里Ⅲ式土器。
35	八坂神社	三吉	不詳。
36	番場	番場	①石棒。
37	三大寺	枝折	①長原式の合せ口式土器棺。
38	朝倉A	下丹生	不詳。
39	朝倉B	下丹生	不詳。
40	江竜	下丹生	不詳。
41	上丹生A	上丹生	①石斧。
42	上丹生B	上丹生	①石斧剥片。
43	立花	中多良	①船元Ⅳ式・咲畑式、醍醐式。②弥生前期中段階。
44	大乾古墳群	上多良	①縄文草創期の石器。
45	筑摩佃	朝妻筑摩	①縄文早期から後期の土器が出土する自然流路（ないし沼状遺構）。主体は船元式、北陸新保式・新崎式。石鏃、石匙、スクレイパー、石斧、石鏃、磨石、黒曜石剥片、新崎式に伴う河童型土偶も出土。中期前半の大形土壇もある。②晩期八日市新保式。
46	磯山城	磯	①縄文時代各時期の土器が出土。ハツ崎Ⅰ式、沼沢式、新保式といった搬入土器を含む。石鏃、石匙、石鏃、楔形石器、石錐、石斧、凹石、磨石、石棒。既に早期の段階で隠岐産黒曜石を搬入する。早期末埋葬人骨2体分で墓壇はなく投棄に近い。早期の面は標高81m。
47	入江内湖西野	磯	①羽島下層Ⅱ式、石鏃。
48	磯湖底	磯	羽島下層Ⅱ式が出土。
49	矢倉川	磯	不詳。
50	入江内湖	入江	①北白川下層Ⅱb式。②凹線文系土器。③凸帯文土器。そのほか、石鏃、石鏃、石錐、凹石、磨石、磨製石斧、石棒、骨角製モリ。